リベルテール

1 0 月号



Libertaire VoL, V, No 11

無政府主義者の機関紙

昭和四十九年十月十五日発行第五十八号昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可 定価一〇〇円(郵送料共)

A 字型の鳥の巣箱 言

連盟について 政治と政治否定 ちょっと考えたこと 白井新平君の公開状に答えて

田 光辰二

横

倉

一次郎

3 3

野 元

> 6 5

7

リベル

テールの

会へ

の手紙

13 9

家ー覚え書その 3

Ξ

「ゼロ成長」下における社会主義とは

席からこれまでにないような大きな拍手が巻きおこった後には、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ等の第三国無限に明るい」とつけたした。この中国が演説を終ったの警告」と真正面から否定し、さらに、「人類の将来は そうである。 た 会構造の差であり、植民地主義と帝国主義の搾取 人口会 「帝国 あ 1) 主 八月、ブカレストで開かれた、国連の第三回 「人口爆発 義者、植民 て、中国代表は、「現在の格 」の危機は、 地主 義者、覇権主 米ソ超大国を中 一義者の 差は、社 V つわ 心とし の結果 1)

る。これは、 そ 10 れに対 とる標 大量に消費しながら、開発途上国 不均等があり、「問 養過剰になっているのに、イ 1 う第三諸国の主張も納得できる。 は ンド での 0 計 して、欧米人は三○○○カロリー 隼 て、 的な熱量は二、四○○から二、五○○カロリの飢餓人口はざっと二億人、人間一人が 一千数百カ 形を変えた植民地主義に 自ら の安全保障をと U U 題は先進諸国 に過ぎな () 0) 12 ない。確に、ここに人の平均摂取カロリロリー以上もとって いつけようとしてい ある。自 人口增 加 トロリー 人が一日 を抑え 6 は 資 る源

> ち 行 る お る がいい きづ であ いいて 上と言 TS まりつつあるように、成長の ろう し、中国 は、「革命と生産」によって発展することが 50 だが、この発展も、現在先進資本主義国 切 れる 0) い のだろうか。ここ当分は、後 うように、「人類の将来は 限界 اح 2 ė あ 進 で る にかき に明

ズあムっ 停滞を 会主義 あわばるなな 産 0) - キズムに有利である。アナ停滞をもたらすにちがいない産力発展の限界は、不可避的 ム運動は解放されるからだ。 なら ものにとっても必要不可欠なものだったのであ る。マルクス主義がヘゲモニーを握っている日本なければならない我々において、それは火急の問 我 K 運 TI は 動に セ VI ٥ اع お D 成長 いて、生産力 わ け、先 下下 拒否する」との批判 ナー い 的に、日本の社会主義運動 進 おける社会主義 0 の発展は、 資本主義国 キズム批 ある意味で、これ 発展は、社会主義運動そーを握っている日本の社 判の一つ 日本に を考 お え ナとし は 1) いなけ しア動、キてナの生 題 で 闘れ

-Щ 野 文二

-1-

三年頃、犬養毅内 閣時 を 代 T のことである。 移 いた \$ のであ 一九三二~

て入れる ような場 また、う を細い は長く てしま を付 5 り付 底を 1+ は D 0 こん うう、 あ るのが すぐこ 竹 1+ 作り方は下 であ す る 所 が喫茶店などで話をす へ出す。出来上 0 国民全 なにし 6 但しこれに ~ 鳥が わして 板を 取り付ける。 にし くことも 一番長持 巣を を引出 以 TS 使 て糞を防ぐ、 くて しまう か 2 T ある。 作 5 使 して 会合は ら新は 作 察 は n 0 L た箱 の犬の ば成 林や 式に 0) 0 会う よ 6 た 2 表に円 るに いよう 箱 なるべ の中 功 \$ 森 を 作り(たぶし の中 なる には 如く 2 で 2 も 70 -ヘ手紙を カュ あ である。 思われ いな べく眼 < \$ 箱 3 ~ 全体に うす 十個 両手で つけ 仲々 C ts を作 V た時 円 5 2 カュ בלל 12 511+ 来 い 引 n 紙 < 0 12 を使う。 6 В ながれ き出し 接書く まるめ は カュ ない 屋 であ ばれ 下 ic 根 0 個

を装って、 カュ さな U とた < さん 0) 人 から 眼

> 叢台 た て手で話 見見 6 V T つか た時 して、 は、次 をするの は、 6 た特高 ぬように、 0 である い 場所や月日の 12 た物な を配 ほ から ったも E って 如何にも苦労したも 大き 打合 のである。 い せ であ は溝 2 た、 を飲 0) 道で捕 0) ま だ。 カン

が安 まで 0 ま 0) 全だっ だ。 た にして生きの 羊の 小 750 3 いメ ょ う によく紙 モは、 カュ U L た、 これも常に危険にさらされ 軍 隊に の中で 一九七四 を食わされ いる時、戦地にいる かみくだき吞みこ たことだ。 ·一八記 2 時位 T n 2 い

白 新平君の公開状に答えて

じまい 大原因 ズム 単に 重 と君 だ、二見が参 陣 0 10 る 勝手だ 参 を愚 L 田 が 加し TE 0) い事 ス 劣な応問 パ T いが参 イ嫌疑は、前田が敗戦 カュ 加者達にうた で使用したく 5, 君が 信じ ない が わ n 後ア カュ う ら極 بح た 最 ナ

る「リ 3 れた 黒連 黒連に に就て + 7 屋 と不 関して の君 良 0) 少年 意見 は、近憲さん 的 は 創立 な集団」と論断さ 初 頭の事 の意見と全然異っ で、 後年の n T U てい 縮 る 1

自 も間 0) 72 協」「自連 違いである事を から 今 1 更意見 生が K 関 を 西 の松竹の はさ 就 附記しておく。 ては運 也 事 もある 企画部 動から三十年間 まい 長、 4 H 愚考 活 1 の宣伝部 する。 逃避し

0

と考えたこと

とし 主義同盟のところに 近藤憲二さんの『 ての運動に 移り つつあ 「今までのル 一無政府主義者の回想』の 0 たのである。」という文章 人』の運動が『 日 階級 本社会

> 第一、 ナキ (七三五 蒲田、 蒲田、エンリコピル 第二、第四日曜日午後一時 東京都大田区西蒲田 (右記同所) 心の人々の読書会です 読書会 ズム運動セ 第三日 エンリコピルるF 1) | | 四 1曜日 ンタ 午後 天 7 _ より 0

スペラント (右記同所 田、エン 週水曜日午後六時 学習会 7 頃より

- 4 -

るが は 運 ٤ そ L て階 まちが 級 カが を認め V 72 だと思う。前記 2 文だと思う い う言葉を毛ぎら 0 であ 0) る 3 L T 0 6

考える 定的 れ 0) な だ ぞ と思 れを 0) \$ で 0 級 あ う 範 7 るし 0) あ 疇に入れるとと 変革を 1) である。そこ 対 求 立 8 す る る 10 \$ \$ Đ 移 10 0 0) 12 V • から その 変革の 対 T する は、 落差 対象と区 階級は 自己規定だ を名 自己 づ 17 別 4 決たし

る カコ る V 階級斗争 だろう。 岩佐作 革命 Ļ わ う 言 4+ 岩佐 7 葉 運 太郎 がは なるがいかり 容 " さん 易 Ł 12 0 \$ だ。岩佐 別に 階 チ チ争一ヤルア 争 級 + T 3 2 12 を いんいし 区キ う言 T 別 0) る事実をみ ス 著 いし 1 葉を 作 る ての を 2 考回 戒めて 「え、" 労気 毛ぎら みれ 心を読む るこ ば とが V V 働運 る。 階級 して でき 2 いし 動 ٤

12 ts 75 る ぜ た原 は る 因 級 思 Ł ٤ え 0) 命 V 12 一いとうつうい言 てな あ 0 12 6 言 う 葉 た 革 から 葉が 言 75 命 最 は W 葉 0 12 使 \$ 近 われ 最近 あま 対 僕は資料 前、 する 1) る あ ح 強 0 ま にりわ \$ 0 烈 1100 躊 使 持 な れ 躇 わな 渇 0 され れい T 望 言葉 ts o V 0) 欠 いか ts る がど ょ よう 落 W がう L

> えてならな 6 い た。 V 最近 0) 様子を 4

め、口がけ よう う 15 に思え T P 人 も、そ 12 75 ナ どうし + 出 0 かも ズム まり 7 3 が n 15 しかたがない。 渇望さ 理論の しれない。 気 研究が 楽しむこ なな 本 や当は多 行 な ٤ 12 わ P か反 3 n 15 0 のてい P て い 0 ナ制 L A る。 ま + 的 で は革命 \$ 0 ズ運 こム動 た結 僕 や、 史 12 を求表研 果 は 0) E

少し 実際、 を 命 0) 気 ts な は 個人 2 恥 革 い 個人 で 命 しい気のするもの 0 TS b 力ででき んし る人以外あるま なんてよほど T 言 葉、 ない ものを個人が 充塞し だ。でも 12 ださ V TC なく 人間関係と T DB 12 11 すい と思 経 بح る なん して 済 う。 生 革 T

0) は 自 個 0 から 3 人 JII 己の 級 よい とはそ 5 0) 5 考え さん は よ根 0) TC だ目先 んる反革命 N 0) TI カュ な時、自己を革命的 づよく植 V 10 ここび き 2 は自 う の職 に対する位置 今、労働運動 分 え 織 1) つけ 業上の 0) 5 な 職 業上 られることに 0 利害 T V 位置 0) 固 る 0) ば 定 あ 利 یے 害よ かいゆ で 12 L てりうみ は定 あ置 1) TS < でも -12 \$ 0) () る す る TS と、そ は ま から ま る \$ • す。 \neg いた 2 個 眼 かめ

T 3 b V) V) れ る る こと 12 15 1) 級 な根 ま 2 す。 L 12 本 0 を な と書 意 くと カコ から から とが 成長 労働 n T 発 V) V) で 者 達 # * 全 す。 TE す る V) 12 共通 0) を 明す

言 葉をと 階級 者 2 を ح ح で 革 6 L 命 は えてて T 的 , Л 運 革 3 U 動 る N 命 0 の 12 中 0 から 対 で 自 わか する 25 由 観 は書 る。 意識 え、 変革 労働 カコ n ٢ 者 T しと てい ま う 階 世 級 ح ん 2 から 2 いを , う労労

12 5 12 3 レス、か、 れ、 お 僕達 い T 連 TI は (決定されるの) 階級 6 級 ないのう 2 6 では葉 う 言 生じ、連合 葉をと を抜きにしては集合としての ではあるまい らえ ~ 0 * いか、と考える。この自己の処し方が、 2 た時 , 目 的 がが 組 連 自 設 織合己定

る

政治

は

生活否定へと向

V

`

現実

カン

5

遠

7

ば

遠

3

カコ

治否定

は 権 力志 12 向 力 志向 0 幻 想 ~ 向 を 打 う。 ち砕こ うと る

人民 ~ 政治否 ع 、人民自 を 治 は 定は え つけ から 自 由 生 一へと向 へと 鎖 きよう で 縛ろ 向 U V 2 う する とす 下 上 カュ カン 力を助長 ら上へと地 る。 5 下 ^ と向 かする 方 いす 必 カン 6 0 中 的 央 12

T 一步 政治 ほどそれ 石否定は生活者は 自身が 事 を 発揮 7 生きる る 事 6 あ 1) , 大 地 12 立 0

n 政 治 石は野蛮人が作り の一歩前進する to と異 常 をき た () L 出した毒 た毒薬であ すの () 正 常 TS 人 間 \$ 2

政を飲 2 1+ は、戦生 否定は生きる 争活 を行なと芸術 事を楽 いが 、一人体 狂い出 ٤ の生き 生きる 血を活 6 事 つあ 0) てる中 12 芸術 专

A STATE

3 政 治 Ifn 鬼 で あ を行 3 間 吸 生き T U

~ \$ 治 否 7 定 す んる 車 反 戦 を 願 反軍 う 備 を 14 Ox 人 間 から 人 間 4 L T #

\$ を 7 我 W 6 るだけ 12 自 では 由 悪 W 0) で ここ 12 堕文を呈

二段 るし ま づ 4 い政治斗争のなかから だ た 争 2 る 欠落して 月 で 0) 4 あ ま 階 ば V 革 想運 0) I を 分 から + () は、 , 7 織 命 権 ス 7 力 あると 論 的 4 動 す 1 41 連合 とは 1 n やのり を TI 感じ たらしい ため 求 ع K \$ + る 向 内 は から ス カン ح ع 家 TS 何 V る D 8 を与え る * おようさりこ う 7 1 6 V うこ あ 7 T N 0) 5 テ 人 お 6 連合形 る 間 ず \$ 2 7 間 あ 1 \$ も原 ろう。 ع る 合 関係 人 ス 12 る い 連 T 間 主 お \$ ح 形 的 ナ は 合 で いこそ連合で 因 経 関 義 6 0) 成 は 成 0 似の一つとし 教の影響をう 革命 さら を思 を連び 連盟 を 合 係 な 済 問 T あ \$ \$ < を . 題 0) るがここ に思想運 想運 ع 社会 質 摘 で i あ を 過 ついけう 題 紅組織 動 渡期 T あ る 問 12 かす 題と てけ どち とし り、アナ る L 7 V あ 動 る T を 12 D た を な ように問題に 、認分め すげ 2 6 T 0) T 路 う わ るらか離る 捉え 手段 がか ち、 12 5 بح 2 1

> 含ん 合もなる 関 う 人 こがの 0 係 5 2 بح から 2 人 -つして 間連 を 2 合 示 0) して閉じ そ L で あ 連 L 0) た りいた合 第 三者 なけ る グは L C ま ルな 連 1 n てた、が、 1 ح そ 、合プれ 0) ば 0 なら ある ば関 て、合で から 第三者と ルル作 75 係 6 T 1 1 1) 1 TI また の人 はプブ TI V な外に 人 W っこの と連 いのお 間 連 人 を二分 しつ わ T 2 合 間 ち、 こな 4 は L す とは 7 る た よ 総 る بح IV 5 す から 1 T 2 プのい連なる

合間 しかす を分離 < 連 T 6, 盟 な TI \$ 1+ 連 < ٤ 分 -ま れ 台 離と \$ あっそして、連盟で かってなる。そして、連盟で る。 かばば た TI カュ そ 1) 6 ない 7 れ TS から 規約に < 連 盟でのな 連 はければ る 盟 理 るのだ。 想状 連 ならの員 態 であ な分 2 る。こ た思想運 いっぱ 他 でのの あ質人 ろは、とに 0) 動 2 う بح

- 6 -

そ 2 0) 係 n る。除 から 2 H 合 2 から 名 6 75 事 項 12 4 人 は必 連盟 ع え # 間 なく n 要 は で る TI ع 除 あ す る。 3 お ける 処分事 何 6 ば TI 故 除 1+ n 15 名 ただ 5 項をも は 事 벎 は 75 項 Ĺ \$ 0 5 0) 答 は 75 は ح え P 11 p るこ そ のこ 連 L \$ 合

はに ~ あ 6 E TS は矛盾す る権 と停 であり で 処分事項 ら削認 削 除 8 3 る

そ 質こアう認 いと 一がる する 2 6 る 2 E ナ カュ 識つ求だ 現 2 う L 展 1 はす 0) 85 3 在 U) る 開 p 名 カュ キわべ勝 6 う 0) う連 に持しスかき負れ ~ から 左翼 0 6 * 盟 E T よ てつた TI 1 で そ 重 は 幻滅 6 7 う なけはなあ れ を ŧ b 主要な一つ な、 単 いれ n こい る。 だ 15 る なる政 アば 0 0) T n 0 ٢ 1+ 100 が レ ア ナ し ア ナ し ー ア いえる。 中 一ナな とき、 1 で 時 6 P で 忘 期 治 キな 思 0) 斗 キナ ナ 左 れはズい o アナーキズム 1 想 左 争ら関 4 0) + 勝負 工翼のは ズ 運 れ心 運 + 翼 P だ X 4 + ズム運動 てい持 どきで 質を超 動 って 動 0) 4 から ス 今まだ、 とし 組 革 受け 75 1 織観と 命く たら は T 二 12 h で بح あ 入 ま 12 之 0 推 そ ちるアの る す 2 V n た 准 0) 同 争が 左 う から カュナ 2 2 3 5 VO 翼 運 6 42 \$ 1 200 T 想 る れの ~ 手 TI 2 動 L + 2 る 2 2 段 いれズ同を N てを とを 運動 2 4 カン い展 で 7 E は

~

P そ P 12 - 1 ま 割紙日かうに あて + た新し T + れ LN 本いこ い から 載 IV る お + 新しない現 TI ま P W O 0 0) る江 とし どみ スす いナ 0) P ح 会 T ま へトの全国 ナーモ ٢ 文 お てあ キそ編えれ集 重要なもの ま りま 散 ス が 書 在、この「 0) ح 0) す 会員 5 6 ると思い غ の視点は、それ P x 連盟分 3 4 10 ٢ L で テ カュ + 0) 連 運 カュ 2 n TS た とし す よう 合結 れて 動 リバ TE 0 から 題 です。 裂後、 0 ~ 1 0) IJ あ 杨 T ま 解 で 12 成い前 N ~ りまれ ベル ح から 0) の動 散の す。 あ L ま進 テ 参 N 自 江 n 0) ** す。例えば「かもしれませ 第 テ全ー国 0 T す 加 0) 1 かテ 覚 藤 は ま らの動 て、そ が、こ 時点 基 三巻目 い ě を! L N 1 敏 П 型盤を築く必 た、「今 るの があ 0) T IV 和 雇自 会」)の 紙 カン * ٤ ナ 3 るようで きよ ら問 n た今、 0) は ばまっせ 味 N 点 など、 六 0 ナ 0) マーカ五 キストで オストで V 0) 2 1) ま 題 八 か果キ カュ 皆 う 役っ 7 \$ 10 5 年 要が えよ 様に 論文 ヺ T 数步進 現 L 割 ŋ V 0 4 で よ 之 第 1+ 在再び 0 な あ を ~ うべの から は ば、 三次 れど るのと確テ ~ 5 かなも 4 ŧ 機 年 カン IV TI L 役 関

な共通 0) まざま + いれ 各 L IE. あ と思 否が ズ は ~ 2 15 七 カン 15 \$ 0 15 IV i 会員 ルテー テ 4 て、 思 7 意識 1+ ま 6 2 V この 明ら \$ 1 75 性 アア 4 た 47 会 す のである 思想 ま 2 のよう 主張 ま から IV ば D ある す。 ナ L ルの 性格 自 対 す カコ 75 0) す のもとに 由、 + あ T に的なな 1) た ~ ちまざま 私たちが 12 会 から T 0) 私 る からです。 ズム」の名 ま 5 \$ 12 明ら れるも ならば 反 自 たち V \$ まで 人 絶対 不 国家、 覚 は まず、 人 法律 ので N さまざまなグ 10 方法 を カュ あるて 。この 間 75 共同して でな の的なもの 1 を 、それ を結 0) は 2 P 0) った人 なく って、 反 0 で 0) 7 ょ 0) ナ 4 ため あ 権力の した \$ 違 カュ す。 ような CK 5 カン 2 12 は ど持 いな ts 0 ス た た 7 運 いくう 現実の がグ から 人 1 教 P で 1 る 現わ 動し は N は ことと、 0) + あ -+ 思 論 点 る 条 0 0 キスと 決 多 1) 7 は + 1 共同活動 ことは 主義 T カュ T TI n 活 あく ズ IV プ L 『リベ 7 がトし いと なか く、ま T 4 お V 動 た性格をは な ス主義 T 2 互 あ 0) から でき ま な 0) いに 中 < うとする 2 0 1) カュ 6 は 中 0 0 理 実質的 た ま 12 でその 反説で V \$ な 0) g. ~ アナ わ テ リ えな 相容 者の す。 はさ から いと であ 思想 自 6 H 0

> Ļ 5 いたと思 何号か は、 会は L ました。それ 意見や経験の交換、理論斗争などの場となる必要があ 気がした ま \$ カュ ま * r ベルテー 0) ある だ IJ 0 です 何 直 0 」とも ベル 何も 2 ع 前 よ た L テー いまり と思 ので のです。三年前 1+ T どうか 考 テー えてい 実践しなかっ ま で、第二表 B n V ルの会の性格 でこの すっま すが IV E る P 6 と思 + かれてありました。実を N ます。で 0) 会 ました あ + 0 どう カン 論文 0 会に な れ ズム た、「リ 0 と思 T 紙に宣言文のよう な から を見 IJ 運 بح た も、それ以後の 0) って W を示す基本的 が、最近は のでは ح 0) 動に って た ~ 2 の江 つつけ 集会に ベル T ルテ い 0 とって残念なことで 残 るの い から ないでしょ テー 念なな 藤さん T ま 1 したが、 読 も何 載らなく N でしょうか。 載っていませ 0) ことだった N N な文章にし 二誌 TI IJ だと 会 0) ベル いま 問 ものが 0) 出 題意識は なった 性格 5 き、意 も読ん 今だにその テー す 席したこ カュ 。 ト ル の と、私 ては を示す بح N 載 す。 思うし でき 外 って ね 0) 7 正な

A

会合 0) から 本 から ひら 無政 月 カン 下 れるはずである。 義者連 D 6 盟 カン n 0) た。 準備 又 10 会の 進 月 備 中旬に 第 V う 2 ~ * 0

非 この V 3 雜 して いろ よう 4 あ 15 るだ た 連盟が必 0) ではは ろう 要か否 から じま 、そ 6 0) カン ない とい 試 み うこと بح を 思 初 う。 8 は カン 1 6 無視 人 12 ょ L た 2

多く ح 又 0) 0) 準備 人 準 中備会は比 々は 会は準 それ 学備会ニュ を知 較 的 ってい 広範 北に活 1 ると思う ス一号を 動し T 発行 から 4 る で よ L た。 * う た TI 6 0 いろ で

京都市 東山区山科 北 花山 栄荘 六反田 町 26 田 0) 8

内

奥

恭

司

気

付

いろ

0)

情

報、批判などを左記へ送って

ほ

L

V

0

\$

る 0) 人 は H -その で 1 集 オ 雑誌 500 ま った 6号を交流会の 6 1 号が 才 4 の会で 発見さ 発行 席 れ た。イ で して い た だい VI オ る雑 4 た。 は 神 誌 戸付 で あ

エスペラ 1 7 う 1 オ ことで 1 4 ント 0) IV 会 5 で 4 あ 0) った。 Iさん 0) 1 プを 0) と0 4人 話によると、こんど若い 2 た、 7 出 بح 発し 6 う た 7 0) 1 で 名づ 1 IV 人 けた とは 4人

> 1 > 才 4 7 0 V 編集印刷 " 1 ・グル を発行 1 なども順次していく予定のようである。 し、クバー プはその手はずとしてまず何冊 ル、通信口号を発行、今 カュ 0

対峙 政 特色は 韓国 送ら フ 治に T S 労働 す V n \$ る たえず自己に立ち帰り、一つの世界 ズ T r 対決し 韓国を受け止 ム体制 者搾取 きた。韓国に対する日 不引 よう を非 を告発 」と題する 4 難 する姿勢をみ 8 L し、又世界の一つでも ようとし、その姿勢が又日本の 帰り、一つの世界として自己に てい る。それ 半紙 本の経済侵略とも 半分 せてい 以上にこの のガ リ刷 ることだ。 ある 1) 新 韓 新 い 聞 之 玉 0) 0 る から

として 村さん 縁だ、と 単 解 僕は さを なる 安易に僕の物理 10 形式に る姿勢がみえるようだ。 はそのような いうことを奥深くに置きながら、その物 僕自身に ts 納得 0 T 甘さは しま 的 3 にで せて う 杉 ě なく、せ しまう。ここで それが ないことに ある 5 いっ は、そ 0) だ。今の は自己批 ぱ いやろう 理的不 れは 判 無

田 田谷区代田 6 0) 27 0) 3 上 村滋

を構 あ 7 色は b 0 ること 何だろ 予測と過去の思 う であろう。 カュ っそれ い は認識が 出が有機 的 たえず有機 10 現在 0) 意識 的

やれ 人 る。 集とし とし 6 T ا د ح 乱死 た為にその方向性 V る ため、と 心」が復刊 L され て次のように た。復刊2号は は 明確 で ts 記して い。 反面 高 V 橋

自る

10

藤でもあ 21 (0 0 足の観点 だ。言 向 的性を 0) 間に う。 2 てな さん からた 2 る 2 カュ 葉 と思 はげ 1) 自 \$ 0 どん かけ 又人 己 自 どして たき落 己表現 に対す う。 として 6 なに対他性 れなが の自己表 し、そう の道具にな いく。高橋さん 0 ら、た 0 色 上 現 を することによっ えず自己 充 12 1) 0) さがる 道具に 分に示 立. 脚し 0) 蒽 言葉を自 な() よ 12 藤は す。言葉は 戾 う さが ってく 又皆 て表現 ح \$ 1己満 2 0) TW る 0

練馬区上石神井一の七四〇 人間社

(吉葉)

交流会印象記

自の T 九月十五・十六日の二日間 一でイ 6 都合と交通の便によって、十五日 たらしい集会に、 次、各自の あ った。ここでは私的印象を述 オムの会、 やって IJ ~1 私は午後四時頃参 い ること、 口 富士宮 . IJ 7 ~ 0) N N 市 午前 にある「 1 べる。参会は テ 加した。 プとし 1 中か IV 三者交 T ら始 S 出 0) \$ 活 席 ま

麓は で、 関誌紙 司 日 12 様子は だけ 藤斌 ちまけ 合同 様子、当方は 等各グループから輔佐役を求めても 議題 る。豪快な笑い 暮は早 슾 0 を発表するの ととに え 0 いて、 で行 さんのざ 労組のF ٤ 酒 10 0 3 育の 夕食にな 2 1) 入 た富士宮市 肴を戴く。各自が 0 ぷり夕闇に 沈ん く、宿泊代を集 きだった 方 る。正 0 V 意義を求 用 の三題を順次取りあ ちで を熱 は名 さんの 意、キ る。次いで主な 客人よろしく年配者の 0 0 っくばらんな話しい声をあげる椿博-発言 古屋 心 直 ってもみうけ を脚下に と思 なと 8 る。話 12 熱 T 0) 語 T は っぽ 2 ころ いるら IJ る I V プファ かめ、 だ 出逢 せば 君が なが のだ ~ 眺め、火を囲んでの 夜 67 世話 でこれが神戸在住 議題として一、グ 話 出 6 6 V 各自の寝床の しい風情、次ぎに全国的 253 \$ 判 げることに れた。八 士、久 を聞 1 0) 12 版 בכל 反 盛に水を飲 討 る式なのだ アの準備、 役 ま」 聞き入りな 論も 論 5 L 群に 応接 があ く。夜景は 0 た でた 創設、一、連 しぶり に話し い書 あ にいと 時に 加 さん一家は る から なる。け 割当で富 わ む。流 が当人 目を 0) となって再び 夕食 IV どう に会 から 1) ts 1 0) ら好 歓談 宝石 、富 ま 6 0) あ プ I の 君 合 った 0 0) 達 \$ げ 通 れど 組織 ts 世 大 士 いであ をふ 士宮 網のを は語 * わ 話 W 変 0 販 TI 遠 喜

が毛布だけでも間に合う。 た 12 をした関係 かない 題、 り将棋を指す気配である。かる。それぞれは別棟の寝所に 0 話し意見 0 カュ れぞれ 連合組織につい と言う。そこ 小上、 私が と反論をお あ ここまで って、さ 説 こでどうい 明す 待 は て "へと てどう ちすると述べた 踏 蚊の一、二匹。 る。そ みき う訳で提 入 n す 1) 流れ n ts る い。時間 若 \$ カン たっここ い人達 + はたっぷ ところ 言した 一時ま も気に 刊 は 切 す で仕舞 とめ 議 カン 7 0 n 3 1) 12 は 0 ある ず 提次 五. を カュ 単 睡 4 言 L 12 0

る。 更に グー自由 5 翌十六 5 \$ 2 て左 宣言する。 4 家 紅 畑 ば 0 茶 顔 地 \$ 主人 一側がな 日、日、 あ がは カン 2 L から 会話)を認め、議題に関し C 下手 きら 1) てそうした 朝か ま 買 は I 1 手にむかってなだれこれなだらかな丘陵でそばい 午前十 豊富な スト R 3 る H て各自 6 A L 結局 0) 12 0) 細 に景色を眺 かってなだれ 蔵書を拝見。さ 走 2 優 13 は先 とつパ 雅 0) る。多人数 だ な食事は こった。 「 話 が期限で 0) L 三議 と めな あ V 関思いがある。 あ て個別 0) み、 論 は S て九 る。 フ 0 た 畠 B ij 結 と茶畑、 餇 との 8 組 時近 0) 限け時 犬の 着 食 織論は 各科 から 事りな 家 0) こは オ 0 < は V V 朝 ク 二交 から 右側 カン 0 口 12 食 から な交代 ず を 玄 ま を いも 牛 た W > いは関 2 待

盟に する 7 聞 を ナつい てくるだろ الا IV える。 U 認 1 4 う 人 スス れな 余程 分 る。長 加入することになるな 4 1 加入すること ~ 8 + T 0 加 を聞く時 言えよ スト 一で引用 0) 8 n 8 プ活動 T は る ど各自 、一、交流会を開 成員の 無論、 いる 支持 連合組織の課題、それ ンの もあろう。

また各自の運動の延長線上の だけ う。一、各自が心底 野 0) が、もっと意見を出 言 ようが、そ 組織活動 した を語 0) 0 C が活発なら、連 討議 では、 間 したP のや K だか P 間が少い。や でその 君 ナ る。 ア T 来る。 と理解 っていること IV 5 0) カン そこ の場 7 ググルル で . ナ 現 き出 i 7 サ 個 はア 状 + 、ルキアシス ま を得 NIN 合 ン人 では 1 で模 で 逢 から 盟 2 _ T 1 で 加 ス ププ hu 私 は 付 T 時 プもはカ 盟 ナ すべきだ うことは充分 1 1 抽象論、 索し 近 1 フ 陣営内 も個人 * お 0) を 盟 開 合い を話 した < 成 認 12 T ě で 員 8 ズ 緇 0 プの プ加 V ě 0 は 755 から 3 4 領 加 ったっむ VI 0) L)、三浦 場面 K 可 る ح 暴 **一**括 705 をみ n 強 ع て、 項 能 力 tt 盟 力 い個 支持 15 4 12 君 働 表者が連 を述 Ħ 意義 2 2 0 だ う人 7 12 W 0) L ٤ ろん なる。 TI 連 終る 善 思 よ 連帯 だ。と T 2 P さん 藤さ 0 うの限動 ベ理 意 う \$ から カュ 自 P 0) カン 文 7 あ ع 動 12 由 12

連帯が即ち連合になるとの考えもあろう。ならばその推 移を想定した上での議論がでるべきだった。 連合は一夕一朝では成らない。ローマは一日にして成ら 一、レジュメは 会合の少くとも一週間前に提出しよう。一、

ずである。 何回でも討論しよう。

以上

(はしもと・ よしはる)

警察権力の「爆弾犯人」づくりの実態をあばく10・26反

支援もないまま、被告やその関係によって、地道にフレ る。し 弾圧集会 社グループ」とよばれた六人の被告が、犯人としてデッ なった「警視総監公舎爆破(未遂)事件」では、「十月 日石ピル郵便局で誤爆した事件等と合わせて「犯人」と デッチ上げられた「増淵グルー チ上げられた。また、「土田邸爆破事件 - ムアップ解体の斗争がなされているにすぎない。三年 弾事件」の捜査が成功した例として宣伝されている。 して起訴され、「三菱重工爆弾事件」におい 狭山 の「爆弾事件」の多発の中で、その「解決」第一号と 裁判斗 かし、もう一つのフレー 争は、大衆的支援のもとに現在斗われてい ムアップ事件は、大衆的 プ」といわれる人達も、 」の犯人として

> 力による、このようなデッチ上げはこれからも発生する 進力になろうとしているとき、「爆弾事件」フレームア危険性は多いし、刑法改悪とあいまって、弾圧強化の推 一歩となると思います。 プの実体を大衆的にあばいてい くことは、反撃への第

日時 十月二十六日 (土)午後5時開催 場所 千駄谷区民会館